



平成29年11月27日 永眠 享年83

訃報

諸熊 奎治 名誉教授逝去

略歴

- 昭和37年 京都大学工学部燃料化学科 助手
昭和41年 米国コロンビア大学客員助教授、博士研究員に採用、
米国ハーバード大学博士研究員、米国ロチェスター
大学助教授、准教授を経て、昭和46年から同大学教授
昭和51年 分子科学研究所 教授
平成5年 米国エモリー大学 教授
平成18年 京都大学福井謙一記念研究センターリサーチリーダー

大峯 巖 (分子科学研究所 名誉教授)

「諸熊です」ハリのある声、分子研研究棟での諸熊先生との初めての出会いである。その時(1977年)の分子研はできたばかりであり、丘の上にはっきりと実験棟が立っており、牧場の木戸のような長い戸を押しあげ構内に出入りした。分子研にはまだ電子計算機が無く、皆で京大の計算センターに数日出かけ岡崎に帰ることを繰り返した。その間、研究棟が建設され計算機も導入されていった。

その頃よく実験棟の横の水銀灯の下で皆でキャッチボールをした。夕食を終え研究室に戻って一段落した夜11時頃だった。40代前半の諸熊先生は学生時代ハンドボールで鍛え上げた腕力で伸びる豪速球を投げている。加藤さんはハイライトをくわえながらミットで先生の速球を「パッチン、パッチン」と受けていた。加藤さんがどんな速い球でも平気で受けるものだから先生のボールの速度はどんどん上がっていた。それから数時間また研究を行った後、帰りの道すがらよくラーメン屋に皆で立ち寄った。バーなどで働いた女性達が食事をしていて、どこか必死に生きているもの同士の共感を感じた。

諸熊研究室は海外の研究者が必ず立ち寄る場所となり、国内からも多くの研究者が滞在し活気に溢れていた。反応の遷移状態の決定や反応ダイナミクスなどの研究に始まり、遷移金属を含む有機分子の触媒サイクルの決定などへと研究の幅も広がっていった。諸熊先生の研究スタイルは正に機関銃式である。研究を連射的に進め、大きな突破口を開き、次の大きなステップへと研究を進めていく。先生の圧倒的なエネルギーの前にグループの学生、共同研究者達は常にてんてこ舞いしていた。

諸熊先生は16年間、分子研で主幹教授、電子計算機センター長を務め、日本の計算機化学の基盤を創り上げた。定年2年前の58歳でエモリー大学に移られた。その送別会で皆が「ご苦労様でした。先生の残されたものを糧として後の者が……」と過去形で話した後、先生が「自分は新しい研究を展開するために米国に行く、これから……」と未来形で述べられたのには会の参加者が皆驚いた。実際、エモリー大学でONIOM法などを開発し複雑分子系へと研究を大きく広げていかれた。

13年間の滞米を終えられ、京都大学福井謙一記念研究センターにリサーチリーダーとして戻られた。先生の研究はまさに自由自在なスタイルであり、フラレンの形成ダイナミクス、生体高分子の反応、多様な分子の状態間交差点の同定など、化学反応の源の研究を真に楽しまれていた。諸熊先生は、常に研究の先頭にたって走り、決して“体制”を造るようなことをされなかった。先生の進まれた跡に自然に大きな道ができた。強烈な個性と溢れるエネルギー、絶え間なく学び、負けず嫌いで、学問にハングリーであり続けられた。私が同センターにいたとき、加藤さんと諸熊先生がたまたま同じテーマの研究をしたことがあり、互いに自分の開発した方法の方が優れているとの趣旨で話をし、あの昔のボールの投げ合いのように競い合っていたのをほほ笑ましく思います。

80歳になり、先生のヒゲもすっかり白くなった。学会に出かけられる前「不整脈があつてね」と言われたのが気になったが、あの諸熊先生だから大丈夫だろうと思っていた。九州での半年にわたる入院の後、京都に戻られた。長い入院生活を余儀なくされ足腰も弱くなられたが、週一回は研究センターに車椅子でこられ研究を続けられた。最後に一緒に食事をしたとき「体力的に難しくなり、研究をやめようかと思う」との趣旨の事を述べられた。「先生、必ず回復しますよ、一緒に科研費を出しませんか」と話した。もし実現していたら、研究テーマは何だろう。でも、先生、私のスローペースに耐えられなかっただろう。

純粹に学問を愛し、人生の最後まで現役として、一人先頭を駆け続け、偉大な足跡を残された諸熊先生が去った。しかし、その一途な、厳しくもやさしい先生の姿は、我々の心の中に生き続けている。

永瀬 茂 (京都大学福井謙一記念研究センター FIFC リサーチフェロー)

諸熊先生は、独創的な理論と計算によるアプローチなくして化学の進展はあり得ないという潮流を作り上げた先駆者で、理論・計算化学の威力と研究標的を格段に広げて、現在の学術レベルを確立された精力的な世界のトップリーダーです。また、この分野の第一線で活躍している我が国のほぼすべての研究者が諸熊先生の指導や影響を直接的あるいは間接的に受けて育ったと言っても過言でないほど、人材育成にも大きな足跡を残されました。

榊 茂好 (京都大学福井謙一記念研究センター シニアリサーチリーダー)

私は諸熊先生の分子研時代と最後の福井謙一記念研究センター時代に、特に近くでお世話になりました。先生を拝見し、到底、真似できないご研究のレベルと activity、ご趣味の深さと広さ、何事にも興味を持たれる若さに驚いてばかりでした。私も 2011 年から福井センターにご厄介になり、外国出張にもご一緒させて頂き、研究上の畏敬の念と共に楽しい思い出を持つことができました。どちらも私の大きな宝物です。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

北浦 和夫 (京都大学福井謙一記念研究センター 研究員)

ロチェスター大学で特別学生としてお世話になった時に、エネルギー分割解析の研究を行いました。居室に入ってきて背後から私のノートを覗き、「ここ、間違っている」と指摘されるのが常で、ごまかしや言い訳が通じない恐ろしい先生でした。奇しくも、お亡くなりになる少し前にお伺いした折、この論文が再録された IJQC の特集号を見せて下さいました。この時のとびっきり優しい笑顔が忘れられません。ご冥福を心よりお祈りします。

前田 理 (北海道大学大学院理学研究院 教授)

先生と一緒に研究させていただいた 7 年余りは、私の価値観を大きく変えてくれました。一線の研究者として世界と肩を並べるための研究姿勢を学ばせていただいたと感謝しています。指導者としての研究への取り組み方、世界への成果の発信の仕方、実験グループとの共同研究の在り方など、世界で理論化学をけん引してきた諸熊メソッドを、今後の研究人生で実践していきたいと思っています。まだまだ未熟な我々を見守っててください。

山下 晃一 (東京大学大学院工学系研究科 特任研究員)

私は昭和 59 年 10 月から 6 年 9 ヶ月、分子研諸熊グループの助手を務めました。振り返ってみますと、若さもあつたでしょうが、私の人生で最も厳しくまた楽しく、研究者としての研鑽を積めた時期だったと思います。これも一重に諸熊先生の薫陶のおかげです。今年 3 月で教授職を無事定年退職しましたが、最後まで熱意をもって研究に取り組めたのも諸熊先生のお陰であると深く感謝しております。先生のご冥福をお祈りします。

古賀 伸明 (名古屋大学大学院情報学研究科 教授)

分子科学研究所の諸熊先生のもとで 1983 年 9 月からおよそ九年半の間お世話になっていました。まだ学位を持っていない博士課程在学中の私をお招きいただくとともに、数多くのことをお教え頂きました。そして多くの論文にご一緒させていただきました。感謝してもしきれません。諸熊先生にはまだまだ多くのやり残されたことがあり、それが途中になってしまったことが残念でなりません。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

Stephan Irle (Senior Research Staff, Oak Ridge National Laboratory)

The late Professor Morokuma is a true giant of quantum chemistry with great empathy for his collaborators, students and friends. He had a keen sense for where the right answers lie and what the right course of action might be in any situation. We thank him for his great enthusiasm, compassion, and remarkable clarity that will always be with us, and we will always thank and celebrate him today and in the future for these tremendous gifts.